

日々是Oracle APEX

Oracle APEXを使った作業をしていて、気の付いたところを忘れないようにメモをとります。

2023年6月13日 火曜日

リモート・サーバーを入れ替えてRESTデータ・ソースの実行環境を切り替える

リモート・サーバーを上手に使うことで、RESTデータ・ソースによって操作する環境を簡単に切り替えることができます。例えば、テスト環境と本番環境の切り替えなどを行うことができます。

以下よりリモート・サーバーの使い方を紹介します。

RESTデータ・ソースを作成する際に、**リモート・サーバー**が作成されます。

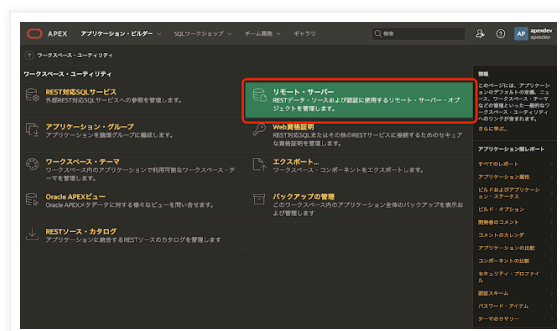


すでに**リモート・サーバー**が作成済みの場合は、それが選択されます。



リモート・サーバーはアプリケーションではなく、**ワークスペース**に作成されます。

ワークスペース・ユーティリティの**リモート・サーバー**より、作成済みの**リモート・サーバー**を確認できます。

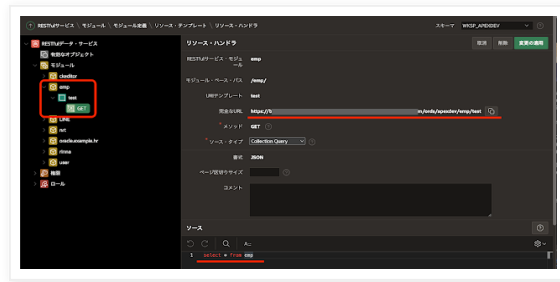


例えば本番環境のRESTサービスが以下のように作成されているとします。

<https://本番環境のホスト/ords/apexdev/emp/test>

ソースは以下です。

```
select * from emp
```

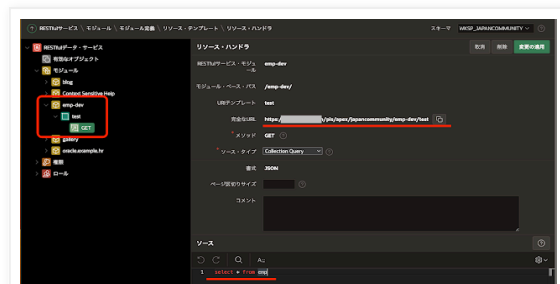


開発環境にも同じRESTサービスが実装されています。

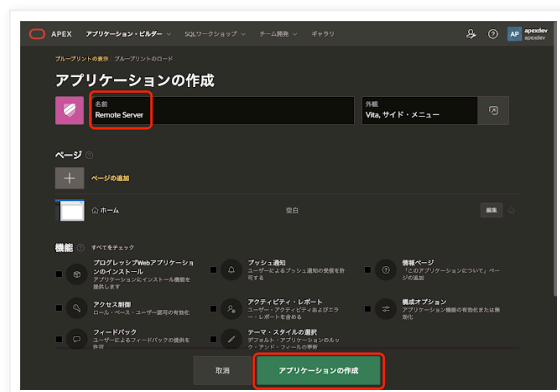
<https://開発環境のホスト/pls/apex/japancommunity/emp-dev/test>

ソースは以下です。

```
select * from emp
```



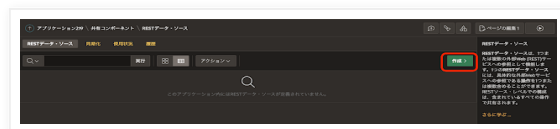
空のAPEXアプリケーションを作成し、最初に開発環境にアクセスするRESTデータ・ソースを作成します。



共有コンポーネントのRESTデータ・ソースを開きます。

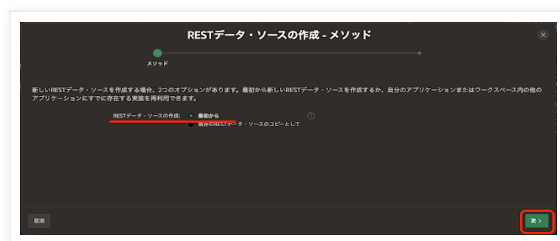


RESTデータ・ソースの作成を開始します。



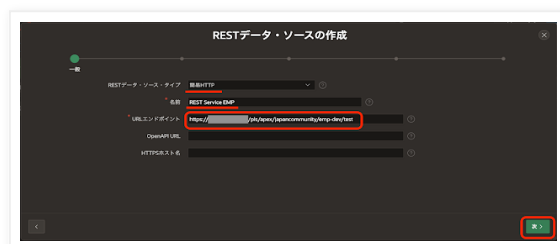
RESTデータ・ソースの作成は最初から行います。

次へ進みます。



RESTデータ・ソース・タイプ、名前をそれぞれ指定し、URLエンドポイントとして、開発環境を指すURLを入力します。

次へ進みます。



切り替える環境と一致しない部分をベースURLとして指定します。切り替える環境と一致する部分はサービスURLパスに記述します。今回の例ではURLの最後のtestの部分だけが一致するため、サービスURLパスはtestになります。

すでに作成済みのリモート・サーバーが選択され、そのベースURLが設定したい値と異なる場合は、リモート・サーバーに新規作成を選びます。ただし、この画面からリモート・サーバーを新規作成すると、名前と静的識別子が自動生成されます。分かりにくい名前になるため、あらかじめワークスペース・ユーティリティよりリモート・サーバーを作成しておくことをお勧めします。

次へ進みます。



ページ区切りタイプはリモート・サーバーの設定に関係しません。

次に進みます。



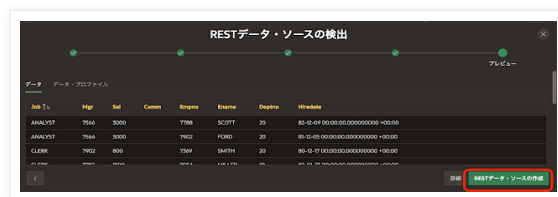
認証もリモート・サーバーに関係しません。

検出をクリックします。



RESTデータ・ソースが検出され、プレビューが表示されます。

RESTデータ・ソースの作成をクリックします。



RESTデータ・ソースが作成されます。エンドポイントURLはベースURLとサービスURLパスの結合なので、これらをどのように分けてもエンドポイントURLは変わりません。



このRESTデータ・ソースを使う対話モード・レポートを作成します。

識別のタイトルをEmployees、タイプを対話モード・レポートとします。ソースの位置としてRESTソースを選択し、RESTソースとして作成したRESTデータ・ソースを選択します。

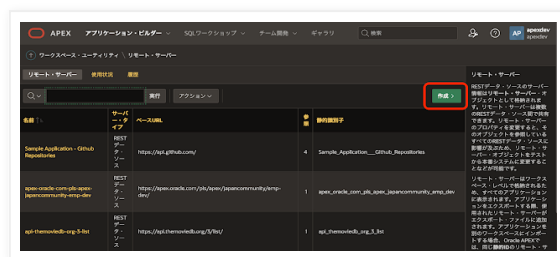


ページを実行します。開発環境にある表EMPの内容が、REST API経由で表示されます。

Job	Mgr	Sal	Comm	Empno	Ename	Orgno	Hiredate
PRESIDENT		5000		7839	KING	90	1981/01/01
MANAGER	7839	2950		7839	BLAKE	30	1981/03/01
MANAGER	7839	2450		7782	CLARK	30	1981/06/09
MANAGER	7839	2075		7566	JONES	30	1981/04/02
ANALYST	7566	3000		7788	SCOTT	30	1982/07/09
ANALYST	7566	3000		7802	KRONE	30	1981/12/03
CLERK	7802	800		7369	SMITH	30	1980/12/17
SALESMAN	7566	1600	300	7669	ALLEN	30	1981/02/09
SALESMAN	7566	1200	500	7521	WARD	30	1981/02/02
SALESMAN	7566	1200	1400	7654	MARTIN	30	1981/05/08
SALESMAN	7566	1500	0	7644	TURNER	30	1981/09/08
CLERK	7369	1100		7676	ADAMS	30	1983/01/02
CLERK	7566	950		7800	JAMES	30	1981/12/03
CLERK	7369	1300		7804	MILLER	30	1982/01/03

これから、本番環境をリモート・サーバーとして登録します。その後、RESTデータ・ソースを本番環境を参照するように切り替えます。

ワークスペース・ユーティリティのリモート・サーバーを開き、作成を実行します。



リモート・サーバーの名前、静的識別子を設定し、サーバー・タイプとしてRESTデータ・ソースを選択します。

エンドポイントURLは、RESTデータ・ソースのベースURLとして扱われるURLです。RESTデータ・ソースのサービスURLパスと結合し、本番環境のRESTサービスを呼び出すURLになります。

必ずしも必要ではありませんが、インストール時にプロンプトを表示にチェックを入れておきます。このリモート・サーバーを使用しているRESTデータ・ソースを含むAPEXアプリケーションをインポートする際に、プロンプトが表示されるようになります。

以上で作成をクリックします。

本番環境のリモート・サーバーが作成されます。テスト環境向けのリモート・サーバーの名称は、分かりやすいように変更しておくとい良いでしょう。

名前	サーバータイプ	ベースURL	静的識別子
Employees_DEV	RESTデータソース	https://[redacted]/v1/api/agent/temp-dev/	1 Employees_DEV
Employees_PROD	RESTデータソース	https://[redacted]/v1/api/agent/temp/	0 Employees_PROD
Sample_Application_Github_Repositories	RESTデータソース	https://api.github.com/	4 Sample_Application_Github_Repositories

RESTデータ・ソースの呼び出す環境を切り替えます。

共有コンポーネントのRESTデータ・ソースより、作成済みのRESTデータ・ソースを開きます。

リモート・サーバーを開発環境から本番環境のサーバーへ切り替えます。

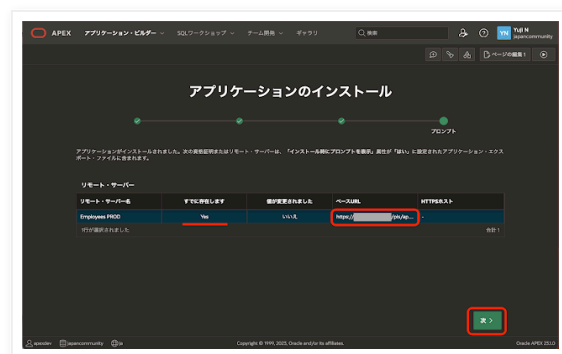
リモート・サーバーを切り替えると、自動的にベースURLが更新されます。

変更の適用をクリックします。これで、環境の切り替えは完了です。

先ほど作成した対話モード・レポートを表示します。同じデータなので違いがわかりませんが、REST APIの呼び出し先は切り替わっています。

Job	Mgr	Sal	Comm	Empno	Ename	Deptno	Hiredate
PRESIDENT		8000		7839	KING	10	1980/01/01
MANAGER	7839	2850		7698	BLAKE	30	1980/05/01
MANAGER	7839	2450		7782	CLARK	10	1980/06/09
MANAGER	7839	2975		7566	JONES	20	1980/04/02
PRESIDENT	7660	5000		7788	SCOTT	40	1980/07/09
ANALYST	7660	3000		7802	FORD	20	1980/03/03
CLERK	7802	800		7369	SMITH	20	1980/07/07
SALESMAN	7660	1600	0.25	7699	ALLEN	30	1980/02/08
SALESMAN	7660	1300	0.25	7521	WARD	30	1980/03/07
CLERK	7660	1200	0.25	7654	MARTIN	40	1980/05/04
SALESMAN	7660	1000	0	7684	TURNER	30	1980/08/08
CLERK	7788	1100		7676	ADAMS	20	1980/07/02
CLERK	7660	950		7600	JAMES	30	1980/01/03
CLERK	7782	1300		7534	MILLER	10	1980/02/03

リモート・サーバーのインストール時にプロンプトを表示の設定ですが、これをオンにしていると、APEXアプリケーションのインポート時に以下の画面が開きます。



この画面より、ベースURLの変更ができます。すでにリモート・サーバーが作成されている場合（すでに存在しますがYesの場合）、登録済みのリモート・サーバーのベースURLが表示されます。そのまま次に進むと、インポートするAPEXアプリケーションから見ると、ベースURLが変更され、REST API経由で呼び出される環境が変更されます。

インストール時にプロンプトを表示がオフの場合は、すでにリモート・サーバーが作成されている場合は、そのベースURLが上書きされます。インポートするAPEXアプリケーションから見ると、同じ環境が呼び出されますが、既存のアプリケーションに影響を与えるため注意が必要です。

本番環境や開発環境といった用途の違うワークスペースの間で、同じ名前、静的識別子のリモート・サーバーのベースURLは同じにするというルールを設ける場合は、リモート・サーバーのインストール時にプロンプトを表示はオフ、同じ名前、静的識別子のリモート・サーバーで、本番環境のリモート・サーバーは本番環境であるRESTサービスを読み出し、開発環境のリモート・サーバーは開発環境であるRESTサービスを読み出すといった運用の場合は、インストール時にプロンプトを表示はオン、という運用になるかと思います。

リモート・サーバーの使い方の紹介は以上になります。

Oracle APEXのアプリケーション作成の参考になれば幸いです。

完

Yuji N. 時刻: 18:40

共有

[ウェブ バージョンを表示](#)

自己紹介

Yuji N.

日本オラクル株式会社に勤務していて、Oracle APEXのGroundbreaker Advocateを拝命しました。
こちらの記事につきましては、免責事項の参照をお願いいたします。

[詳細プロフィールを表示](#)

Powered by Blogger.
